

愛と

まごころの

指

サリバン女史の手紙

ジョン・A・メーシー―編

万成滋―訳

遠藤豊吉―解説

●現代教養文庫●七九七



訳者略歴

万成 滋 (まんなり しげる)

1913年 岡山県に生まる

1939年 東京大学経済学部卒

以後翻訳を業として今日に至る

《現住所》 神奈川県茅ヶ崎市

解説者略歴

遠藤豊吉 (えんどう とよきち)

1924年 福島県に生まる

1944年 福島師範学校卒

《現 在》 武蔵野市立井之頭小学校教諭

《著 書》 「教室の窓をひらけ」「子ども・親・教師 三つどもえの教育」
(共著)

《現住所》 三鷹市井の頭2の27の17

《お願い》

☆ご愛読ありがとうございました。小社ではみなさまの声を参考
に、より良い本を作るよう努力しておりますので、本書の
読後感をお聞かせくだされば幸いです。また内容や造本につ
いても、お気づきの点がありましたらご指摘ください。

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記しております。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速
お取替します。

☆本書巻末に記載の広告中、定価に変更がある場合もあります
ので、あらかじめご了承ください。

現代教養文庫 797 愛とまごころの指

© 1973

昭和 48 年 10 月 30 日 初版第 1 刷発行



訳 者 万 成 滋
解 説 者 遠 藤 豊 吉
発 行 者 小 森 田 一 記

発行所 株式会社 社会思想社

(113) 東京都文京区本郷1の25の21

電話代表 (03) 813-8101

振替東京 71812

0197-10797-3033

三松堂印刷・黒田製本

現代教養文庫

797

愛とまごころの指

—サリバン女史の手紙—

ジョン・A・メーシイ 編

万成 滋 訳

遠藤豊吉 解説

社会思想社刊

もくじ

シ・~~女子~~の教育

5

ハン女史の手紙

19

ハン女史の報告

126

解

説

182

ヘレン・ケラーの教育

サミュエル・グリッドレー・ハウ博士がローラ・ブリッジマンの指を通して彼女の知性に働きかける道を開いてから、今年で六十五年になる。ローラ・ブリッジマンとヘレン・ケラーという二つの名前は常に結び付けて記憶される名前であろうが、サリバン女史の事業を説明しようと思えば、まずハウ博士がブリッジマンのためになしとげたことを理解しておく必要がある。それと言うのも、ハウ博士こそ偉大な先駆者であつて、サリバン女史の仕事だけでなく、およそ盲とろうの二重の不具に悩む人々の教育に当たる者の仕事は直接にハウ博士のおかげを受けているからである。

ハウ博士は一八〇一年十一月十日ボストンに生まれ、一八七六年一月九日同じくボストンで没した。彼は偉大な慈善家であつて、特に精神薄弱者、盲者、ろう者など欠陥に悩むあらゆる人たちの教育に関心を持っていた。当時の時代にはるかに先がけて、

ハウ博士は貧民と病人との救済を目的とする多くの政策を提唱し、そのために嘲笑を買ったが、しかしその主張は今日ではすでに実現されている。ポストンのパーキンス盲学院の院長であった博士は、ローラ・ブリッジマンのことを耳にして、一八三七年十月四日に彼女を学院に連れて来させた。

ローラ・ブリッジマンは一八二九年十二月二十一日ニュー・ハンプシャー州ハノーバーで生まれた。ハウ博士がローラに対して実験を試み始めた時には、彼女はもう八歳近くになっていた。ローラは生後二十六ヶ月のとき猩紅熱のために視覚と聴覚を失い、さらに嗅覚と味覚も失ってしまった。ハウ博士は実験を重んずる科学者であり、同時に深い信仰と慈善の精神にもとづく、ニュー・イングランドの伝統的な先驗論を奉ずる人であった。科学と信仰の両者が一つになって、ハウ博士を導き、ローラ・ブリッジマンの魂に到達しようという試みを行なわせたのである。博士は、ローラもまた、他のあらゆる人間と同じく、生まれながらに魂をさずかっているものと信じて疑わなかった。博士は浮き彫りにした字を使ってローラを教育しようと計画し、まずそういう字を書いた紙片を品物に貼りつけ、次にローラに紙片をその意味する品物につけた

り逆に品物をあたえて、その名前の紙片を選ばせたりした。こうしてローラが（博士の言葉によれば）犬が芸を覚えるのと全く同様に、浮き彫りの単語と品物とを結びつけることができたすと、博士は、単語をアルファベットの文字に分解して、単語の綴りを作ることを教え始めた。それが成功した時、博士は、この目も見えず、口もきけない子供の心にも文字を使って言葉を伝えることができるという確信を得た。ローラは、博士の教育を受けるまでは、話すことを習わなかった赤ん坊と同じ状態、いや、それ以下の状態にあったといってもよい。彼女の頭脳はそれまで数年間、普通の場合自然にあたえられる栄養を欠いて育っていたからである。

二ヶ月の間、浮き彫りの文字だけを使ってローラを教育してから、ハウ博士は学院の教師の一人を派遣して、あるろうあ者から指文字を習わせて、それをローラに教えさせた。そしてそれ以後は指文字がローラとのコミュニケーションの方法となった。

一、二年後から、ハウ博士はローラを自分では教えないで、他の教師たちにまかせ、彼らが博士の指示に従ってローラの言語教育を行なった。^註

註 メアリー・スイフト・ラムソン夫人著『ローラ・デューイ・ブリッジマンの教育』参照。

ハウ博士のなしとげた仕事は、まったくどんなに言葉を尽くしても賞めつくせるものではない。博士は研究者としては、いつも科学者の態度を取りつづけた。ローラ・ブリッジマンの記録を残す場合にも実験室で働く者のやり方を片時も忘れなかった。したがって、ローラについての博士の記録は組織的で、用意周到である。科学的な立場から見れば、ヘレン・ケラーの成長について、同様に完全な記録ができなかったのは不幸なことである。しかしそのこと自体がローラ・ブリッジマンとヘレン・ケラーとの相違をはっきり物語るものである。ローラは常に意欲的な研究の対象であったに過ぎないが、ヘレン・ケラーはまたたく間にはっきりとした個性を持つ人間になったので、彼女の教師は、生徒の欲求に追いつくために、息もつげずに走りつづけなければならず、そのため科学的な研究を行なう時間も精力もなかったのである。

ある意味ではこれは不幸なことである。サリバン女史は最初、ヘレン・ケラーがローラ・ブリッジマンよりもずっと興味があり、成果もあがる生徒と知って、ある手紙の中に記録を取ることが必要だと記している。しかしサリバン女史は、その性格からしても、またそれまで受けた訓練からしても、生徒をその成長発展に無用な実験や観

察の対象にすることはできない人だった。あることを成しとげ、ある一定の目標に到達するやいなや、この教師はそれなり、後ろを振り返ったり、自分の取った方法を記述したりはしない習わしの人だった。事実の説明は、事実それ自体と、先を急ぐ必要とに比べれば、取るに足らぬものだった。それ以外にも、サリバン女史の記録が不完全だった理由が二つある。物を書くことは彼女の目にとってはいつも大きな重荷であったということが一つ、もう一つは、最初彼女が発表したものが不正確に使用されたため、データの発表を控えるようになったことである。

サリバン女史が、ハウ博士の義弟で、パーキンズ学院院长であり、博士の後継者となったマイクル・アナグノス氏にヘレンの教育について初めて報告を送ったとき、ボストンの新聞紙はすぐさま大げさな記事を書きはじめた。サリバン女史はそれに対して抗議した。一八八七年四月十日、すなわち彼女がヘレン・ケラーのところへ行ってからわずか五週間後の日付けの友人への手紙の中で、彼女はこう述べている。

「……ボストン・ヘラルドを送ってもらって見ましたが、ヘレンについてはかげた記事が載っていました。ヘレンが『すでに流暢に話して』いるなどというのですか

ら呆れてしまいます。それなら二歳の子が片言をしゃべるのだって、流暢に話すと言えるでしょう。二歳の子が金切り声をあげたり、はしゃいだり、泣いたり、鼻を鳴らしたり、わめいたり、ものを蹴とばしたりするのまで会話だと言うのなら、それは流暢どころか、雄弁だと言っているでしょう。わたしが、任された大きな仕事を果たせるように念入る準備教育を受けたなどと書いてあるのもこっけいです。残念なことに、準備教育の中に単語の綴りを教えることが入っていなかったのです。それさえあったら、どれだけ助かったか知れませんのに」

また一八八八年三月四日付けの手紙にはこう書いている。

「ヘレンとわたし自身についての記事や噂を全部が全部知らないでいるのはまったくありがたいと思います。今までに知っていることだけでもう十分です。手紙の来る度にばからしい記事や話の知らせです。真実は新聞に向くほどすばらしいものではありません。そこで新聞は水増しをし、尾ひれをつけます。ある新聞はヘレンが積み木を使って幾何の問題を証明してみせたと書いています。この次にはきつと、惑星の起源と将来とについて論文を書いたと言うのでしょう」

一八八七年十二月、パーキンズ盲学院院長の報告書が出たが、ヘレン・ケラーに関する報告書としては最初のものであった。サリバン女史は、アナグノス氏に求められて、この報告書のために心ならずも、自分の仕事の説明を書いた。この説明と、報告書のところどころに散見する女史の手紙からの抜粋とが、ヘレン・ケラーについての、最初の正しい情報源である。サリバン女史は一八八七年十月三十日付けの手紙の中で、この報告書に触れている。

「わたしが『報告書』に書いた記事をお読みにになりましたか。アナグノス氏は、あれが大へんお気に入って、ヘレンの進歩は『最初から凱旋行進』だと評し、わたしのことを過分の言葉でいろいろとお賞めになっています。しかしアナグノス氏は少し誇張される傾きがおありのようです。とにかく表現があまりはなやかで、単純な事実がわかりにくくなってしまします。たしかに、ここ何ヶ月かの仕事はアナグノス氏の目には凱旋行進とも映ったことでしょうが、しかしその反面非常に小さな成功でも、そこにたどりつくまでの、遅々とした、苦しい道順には人はあまり目をとめないものです」

アナグノス氏は大きな学院の院長であつたから、彼の言葉の方が、そのもとになっているサリバン女史の説明の中の事実よりも大きな効果を生じた。新聞はアナグノス氏の熱っぽさをもとにして、それを百倍にして報道した。ヘレン・ケラーのところへ行つてから一年後には、サリバン女史とその弟子は途方もない作り話の中心になつてしまつていた。そして世界中の教育家たちがそれぞれ発言したが、大半は事態を紛糾させただけで、結局は今日から見るとこっけいな大論争が巻き起こつた。ろう者教育に当たつてゐる教師たちは頭から、サリバン女史のなしとげたということは元来不可能なことであるときめつけ、彼女の述べたことも信用できないとした。しかしそれは、サリバン女史の記述がアナグノス氏のあいまいな雄弁の中には含まれたところから生じたのであつた。こうして謙遜に語られた時には実にすばらしいヘレン・ケラーの話が不幸にも初めから誇張した前ぶれで語られ、当然のこととして、無知の輕信か、懷疑的な反感かのいずれかで迎えられることになつたのである。

一八八八年十一月、サリバン女史の第二の報告を載せた、パーキンズ学院報告書が發表され、それからしばらくは公式の發表は行なわれなかつたが、一八九一年十一月

になって、アナグノス氏が、ヘレン・ケラーについての一切を網羅した、最後のパーキンズ学院報告書を公にした。サリバン女史はこの報告書のために、それまでで、もっとも完全で、もっとも長い文章を書いた。この報告書の中にヘレンの作文「霜の王さま」が発表されたのがきっかけで、前よりも烈しい論争が起こったのである。

他の人々の方が自分よりもヘレン・ケラーのことをよく心得ているかに語る有様を見て、サリバン女史は沈黙を守った。その沈黙は十年に及んだのだが、ただ彼女はその間に、最初のボルタ・ビュロー版「ヘレン・ケラーの記念」のために執筆したのと、ベル氏の求めに応じて一八九四年に、アメリカろう者言語教育促進協会のシャドーカにおける集会のために執筆したのと、二つの文章だけを発表している。ベル氏やその他の人々がサリバン女史に、彼女には、教育という大目的のために知っていることを書く義務があるとすすめたとき——一般的な見地からすれば、たしかにその通りだったろうが——サリバン女史は、自分の時間もエネルギーも残らず生徒のヘレンに捧げる義務があると当然な答えをしている。

サリバン女史は今日、自分とヘレン・ケラーについてまちがったことを書く人があ

った場合、たといその人が友人の一人であつても、嘆きはしないで、むしろおかしがつている。しかしヘレン・ケラーの書物には、教師としてのサリバン女史が現在あたえ得る、一切の情報が含まれるべきだという点を理解して、ヘレンを教え始めた最初の年に書かれた手紙の抜粋を公表することに同意した。以下に掲げる手紙はソフィヤ・C・ホプキンズ夫人宛てのものである。ホプキンズ夫人はサリバン女史が遠慮のない手紙を書き送った唯一の人であるが、パーキンズ学院で二十年間寮母を勤め、サリバン女史が学院の生徒であつた間は、母親と同じであつた。以下の手紙の中には、サリバン女史の仕事がほとんど一週間ごとに記録されている。その細部の点については、彼女が後に次第に一般論に移って行くにつれて、自分でも忘れてしまったものがあつた。サリバン女史の用いた教育方法の中に原則を発見しようとしても、それは無駄で、あるのは、彼女のした仕事に後から理論をくつつけたものだけであると考える人が多いが、しかしこれらの手紙を見ると、彼女が自分のしている仕事をはっきり分析していることが明らかである。当時、彼女は自分自身の批評家であつて、後日少々不用意に、別に特定の方法をとつてはいないと言明はしたけれども、実は明白に自分

の仕事から学んでおり、ろう者の教育だけでなく、あらゆる児童の教育上、ユニークな価値を持つ教育方針を作り出していた。彼女の手紙や報告の抜粋は教育学に対する重要な貢献をなすものであり、ダニエル・C・ギルマン博士の意見を十分に裏付けるものである。ギルマン博士は一八九三年、ジョンズ・ホプキンス大学の学長であった頃、次のように書いている。

「あなたが、すばらしい生徒の教育に際してお採りになったいろいろの方法のご説明を実に興味深く拝読いたしました。英知をもってそういう方法を実行され、愛情をこめて努力を惜しまれなかったことに對して、まことに感嘆を禁じ得ません」

アン・マンズフィールド・サリバン女史はマサチューセッツ州スプリングフィールドの生まれで、ごく幼い頃にはほとんど全盲となり、一八八〇年十月七日、十四歳の時にパーキンズ盲学院に入学した。後に彼女の視力は一部回復した。

アナグノス氏は一八八七年の報告書に述べている。「彼女は、もっとも低い、もっとも初歩的な点から学業を始めねばならなかったが、最初から、成功を保証するだけの気力と才能とを持っていることを示した……彼女はけなげな努力の末に目